様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００３２５

研究課題名（和文）他者の記憶のアーカイブ――戦後日本社会における従軍体験テクストに関する基礎的研究

研究課題名（英文）Archiving the Memories of Others: A Basic Study on the Narration of Military Experience in Post-War Japanese Society

研究代表者
五味渕　典嗣（GOMIBUCHI, Noritsugu）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：１０４３３７０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦争体験者・戦場体験者による体験記や回想記を文学研究の手法で分析することで、そこに刻まれた他者の痕跡や、公的な歴史の枠組みから逸脱するような対抗的な記憶の契機を再評価することを目指した。
３年間の研究活動を通じて、戦後日本で「先の大戦」を語る際には、戦争末期の1944年・1945年の出来事がとくに多く語られる傾向があることを確認した。また、朝鮮人や中国人、連合軍捕虜の連行と強制労働にかかわる記憶が、地域の中でどのように記録されてきたかを検証した。さらに、戦場体験者としての「父」の姿を描いた文学テクストを分析、戦後日本文学が暴力の記憶を抱えた身体をどう表象してきたかを検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
①従来歴史的な資料と見なされることの多かった戦場体験記を文学テクスト分析の方法で検討する道筋を開いたこと。
②敗戦後の日本社会が「他者」と位置づけてしまった人々にかかわる過去の記録と記憶を継承する試みを、現在の立場から再評価したこと。
③国家や社会の公的な歴史の語りに対抗する記憶の問題に関心を持つ国内外の研究者とのフィールド調査や学術交流を通じて、今後の研究ネットワークの土台を強化できたこと。

研究成果の概要（英文）：　In this study, I have attempted to re-evaluate the traces relating to others and the counter-memories that deviated from the framework of accepted public history by analyzing experiences written by war survivors through the methods of literature research.
Through my research activities over the past three years, I have confirmed that there is a distinct tendency in post-war Japan to talk mainly about the events of 1944 and 1945, at the end of the war, when talking about World War II. Further, I examined how memories of the abductions and the forced labor of Koreans, Chinese, and Allied Prisoners of War were recorded in the region. Moreover, by analyzing the literary texts depicting the “father” as a battlefield survivor, I examined how post-war Japanese literature represented the body and its memories of violence.

研究分野：日本文学

キーワード：戦争記憶　対抗的記憶　従軍体験　日中戦争　アジア太平洋戦争　表象

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

戦後日本社会にあって､日中戦争･アジア太平洋戦争の従軍経験者による戦争･戦場の語りは、「二度とくり返してはならない悲劇」の例として、「平和の尊さ」を広く訴える重要な言説資源と位置づけられてきた。しかし、1990 年代以降、「戦争の悲惨さ」という常套句で語られてきたその種の語りは、「われわれ＝日本人」を帝国日本の加害責任・植民地支配責任に対する反省を欠いた「被害者」として語ることで、「われわれ＝日本人」に閉じられた「平和」を肯定する役割を担ってきた、という厳しい批判にさらされてきた。

だが、戦後日本社会が孜々と積み上げてきた戦場体験・従軍体験の語りは、単に自己慰撫的な言説の集積とのみ片付けてよいのだろうか。本研究課題に先立って研究代表者（五味渕）は、日中戦争の同時代に公刊された従軍記・戦争体験記を幅広く分析する作業を行ってきたが、その結果見えてきたのは、どれほど厳格な言論統制下にあっても、また、文学の専門的な訓練を受けたわけではない書き手のテクストにさえ、公的な戦争の語りの枠組みから逸脱するような表象や痕跡が刻まれてしまう、ということだった。だとすれば、同様のことは、敗戦後に書かれた従軍体験テクストにも言えるはずである。

日本語による近現代文学研究のアプローチは、書き手の意図やテクストの主題とは別のレベルで刻み込まれてしまった細部に焦点化することで、書き手がさらされた現実の手ざわりや、欠く身体の無意識、他者の声の痕跡を読み出す方法を鍛え上げてきた経緯がある。本研究では、そうした文学研究の発想と手法を援用することで、「先の大戦」をめぐる戦場体験・従軍体験の語りをテクストとして再評価し、分析・記述することを目指したのである。

２．研究の目的

本研究着手の段階で掲げた具体的な研究目的は、以下の２点である。

（１）日本敗戦後に書かれた戦記や回想記をテクストとして分析し、対抗的な戦争記憶のメディアとして再評価すること。また、その作業を通じて、戦争体験・戦争記憶をめぐる同時代の政治的・社会的・文化的コンテクストとの相関について検証し、戦後日本における戦争記憶の枠組みを内側から批判する契機を見出すこと。

（２）日本近現代文学研究の方法的な蓄積を狭義の文学言説ではない「書かれたことば」の分析と記述に援用することで、日本語の文学研究を広く社会的な知識の総体を対象とする学知として積極的に再定義していくこと。また、その分析と記述の成果をもとに、問題関心と研究対象を共有する隣接領域の研究者との学術的な対話を深化させること。

３．研究の方法

具体的な研究の実施にあたっては、以下の３つのアプローチを採用した。

（１）戦争記憶を位置づける政治的・社会的・文化的な枠組みの歴史的検討。戦後日本をめぐっては、しばしば加害の記憶の忘却と「被害者意識ナショナリズム」の問題が指摘されるが、そうした語りの枠組みの生成と再生産の様相を明らかにすべく、戦争や植民地支配にかかわる「負の記憶」の舞台となった場所に注目、地域の中で過去の記録と記憶がどのように語られてきたか、経年的に追尾した。また、学際的・比較史的な観点も重視した。近年、欧米の文学者や歴史家が積極的に取り組んでいる二世・三世の戦争記憶をめぐる歴史実践を参照しながら、日本の戦後文学が戦場体験者・軍隊経験者をどう描いてきたかを集中的に検討した。

（２）戦争文学・戦争映画・従軍体験テクストの調査と分析。各地の図書館や資料館が収蔵する未公刊資料も含め、日本にとっての日中戦争・アジア太平洋戦争にかかわるテクストを広く調査し、戦場や戦地で出会った他者がどのように表象されたか／表象されなかったかについて、文学研究の手法を用いた検討を行った。研究を進めていく上では、とくに 1941 年 12 月以降の東南アジアの戦場と、1944 年 11 月以降の「玉砕」「特攻」の語りに注目した。

（３）戦争記憶のイメージ化にかんするフィールド調査。国内・国外で戦争の死者や被害者にかかわるモニュメントや、博物館等関連施設での展示のあり方を調査し、それぞれの場所で、どの戦争・戦場が、いつごろ、誰によって、どのようなイメージで表象されたかを検討した。また、多くの人々に長く苦しい移動を強いた 20 世紀の戦争をめぐって、ナショナルな枠組みでは捉えられない複雑な生を生きた人々の記憶に関心を持つ国内外の研究者と連携し、それぞれの国や地域がそうした人々の記憶をどう位置づけているかについて、共同でフィールド調査を行い、意見交換と研究交流を行った。

４．研究成果

上記の研究方法（１）～（３）に即して、本研究の成果を摘記する。
（１）2018 年に単著『プロパガンダの文学　日中戦争下の表現者たち』（共和国）を刊行、日中戦争期の同時代に語られていた戦争・戦場の表象と、それらの生産・流通・受容に際して文学・文学者が果たした役割を批判的に検討した。また、同書にかかるブック・トークや研究会に参加し、歴史学・社会学・社会運動など、従来の日本近現代文学・文化研究の枠組みにとどまらないさまざまな立場からの問題提起を受け止め、議論することを通じて、本研究課題の問題意識を深化させるとともに、領域横断的な研究のネットワークを作る事ができた。
　こうした国内外での研究交流は 2019 年度以降も継続した。2019 年 10 月には、福岡大学で開催された「若手韓国学セミナー」に参加、2019 年 10 月と 2020 年 1 月には台湾・淡江大学と米国・ワシントン大学で大学院生を対象に、日本語の戦争文学研究をテーマとする講義と対話を行った。2019年12月には韓国・ソウルで開催されたコロキアム“Rethinking East Asian Literature in the Era of the Second Sino-Japanese War”に参加、日中戦争をめぐる文学表現にかんする研究発表を行った。こうした機会は、国際的・学際的なスケールで「対抗的記憶」をめぐる対話を続けることの意義を実感させる機会となった。
　加えて、2019 年度から 2020 年度にかけては、イヴァン・ジャブロンカやエヴァ・ホフマンら、ナチスによるホロコーストの犠牲者・生存者の子や孫の世代が行った歴史実践に注目した。本研究では、特に「加害者の子どもたち」が親世代の戦争記憶とどう向き合うかが重要だと説いたホフマンの議論を参照しつつ、村上春樹のエッセイ『猫を棄てる』（文藝春秋、2020 年）を、先蹤での加害の記憶を内攻させた「父」の身体と向き合った歴史実践と位置づける論考を発表した。
（２）従軍体験テクストの調査・分析としては、1941 年 12 月以降の戦争にかかる従軍報告・戦争文学テクストの分析から、「大東亜」の他者たちとのコミュニケーションの挫折の表象が、語りの中に人種主義的な論理を召喚してしまうメカニズムについて検討した。また、日本近代文学館が所蔵する高見順資料の調査から、高見が「徴用」で従軍したビルマでの取材記録ノートを確認、高見が「従軍作家」という枠組みの中で独自の表現を模索していたことを論じた。さらに、日本列島の対する本格的な空襲が始まる 1944 年秋以降の時期について、日本敗戦後に公刊された文学者・知識人の当時の日記と同時代の新聞・雑誌メディアの言説とを照合し、戦時末期から敗戦直後にかけてのメディア空間を立体的に捉え返すことを目指すとともに、敗戦後の常套句となった「戦争の悲惨さ」をめぐるイメージが日本空襲開始以後の時期の体験の記述に依拠していることを明らかにした。
（３）本研究課題の実施期間の中で、北海道・岩手県・茨城県・山梨県・静岡県・愛知県・滋賀県・兵庫県・岡山県・広島県・福岡県の護国神社や旧軍墓地のフィールド調査を行い、モニュメントの造型や碑文の文言の分析なども含め、各地域がどの戦争の・どの場面を記憶し、いかなる「顕彰」活動を行ってきたかを調査した。また、2018 年度には広島、2019 年度には台湾・韓国・米国に出張、戦争文学・戦争記憶にかかるワークショップや研究者との交流・対話、現地でのフィールド調査を行った。新型コロナウイルスの感染拡大の結果、「研究の完成期」と位置づけた 2020 年度に国内外での資料調査・フィールド調査が行えなかったことは残念という他ないが、オンライン上での研究交流を継続することで、研究を次の段階に進めるための準備を整えた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 五味渕典嗣	４．巻 11
２．論文標題 新収資料紹介『従軍文藝家一行寄書軸』	５．発行年 2018年
３．雑誌名 大妻女子大学草稿・テキスト研究所　研究所年報	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 五味渕典嗣	４．巻 50
２．論文標題 『麦と兵隊』映画化をめぐる二、三の問題	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大妻国文	６．最初と最後の頁 103-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 五味渕典嗣	４．巻 1291
２．論文標題 父の侵略戦争体験と村上春樹『猫を棄てる　父親について語るとき』を読む	５．発行年 2020年
３．雑誌名 週刊金曜日	６．最初と最後の頁 52-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 五味渕典嗣	４．巻 16
２．論文標題 戦場の高見順――日本近代文学館蔵「陸軍宣伝班資料ノート」「ビルマ雑記帖」から	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本近代文学館年誌　資料探索	６．最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 五味渕典嗣
２．発表標題 接触と包摂――アジア・太平洋戦争期における「大東亜」の心象地理
３．学会等名 第３回福大韓国学シリーズ若手研究会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 五味渕典嗣
２．発表標題 帝国の自画像――想像される「大東亜」
３．学会等名 東アジアと同時代日本語文学フォーラム第7回台北大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 五味渕典嗣
２．発表標題 日中戦争期戦記テクストにおける表象の論理
３．学会等名 コロキアム ”Rethinking East Asian Literature in the Era of the Second Sino-Japanese War"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 五味渕典嗣
２．発表標題 〈玉砕〉の文法――アジア太平洋戦争末期の死の表象
３．学会等名 早稲田大学国語教育学会第282回例会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

1．著者名 坪井秀人、シュテフィ・リヒター、成田龍一、林志弦、野上元、十重田裕一、紅野謙介、石川肇、大原祐治、辛島理人、渡辺直紀、佐藤泉、鳥羽耕史、木村朗子、五十嵐惠邦、北浦寛之、増田斎、河原梓水、片岡美有季、田村美由紀、光石亜由美、服部徹也、北中淳子、高榮蘭、五味渕典嗣	4．発行年 2019年
2．出版社 三人社	5．総ページ数 608
3．書名 戦後日本文化再考	

1．著者名 五味渕典嗣	4．発行年 2018年
2．出版社 共和国	5．総ページ数 443
3．書名 プロパガンダの文学　日中戦争下の表現者たち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関